

〈報告〉

身体機能障害を有する壮年期がん患者への支援

山口 聖子*;**・広沢 正孝**

How to support middle aged patients who have severe physical disability caused by terminal staged cancer?

Seiko YAMAGUCHI*;** and Masataka HIROSAWA**

1. 目的

緩和ケアチームは治療期～終末期、臨死期に至るまで継続した関わりを求められ、その期待される役割は症状緩和を超え、がんと共存しながら生きようとしている人の人生を支えることにある。がんの転移や浸潤により下肢麻痺となった患者にとっては、「歩きたい」のに「歩けない」状態でがんと共存して生きてゆくことになる。今回は、下肢麻痺を有する壮年期のがん患者と家族の不安と希望を、キューブラー＝ロスの疾病ないし死の受容の過程³⁾をもとに明らかにし、より適切な支援方法を検討した。

2. 方法

X 大学病院緩和ケアチームで担当した30～50代の身体機能障害を有するがん患者と、その家族6事例を対象に、身体症状、精神症状、日常生活動作、仕事、役割、患者及び家族の意向、その他の内容を、診療録からできるだけ原文のまま抜き出し、時系列に表にまとめた。その後、キューブラー＝ロスの死にゆく患者の心理過程と照らしながら、6事例の類似点と相違点を比較検討し、下肢麻痺をきたし

た患者と家族の希望の質およびその変遷を考察し、緩和ケアチームとしての支援方法を検討した。

3. 結果

6 事例中、2 事例の受容の過程を図 1, 2 に提示し

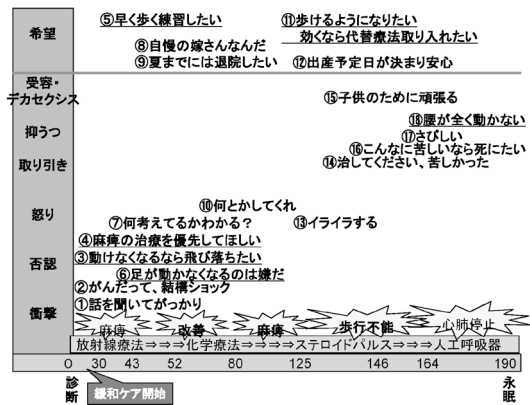


図1 症例Aの心理過程

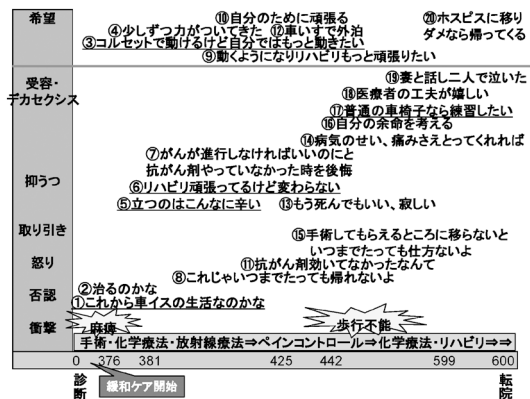


図2 症例Dの心理過程

* 順天堂大学医学部附属順天堂医院がん治療センター
Juntendo University Hospital
** 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科
Graduate School of Health and Sports Science,
Juntendo University

た。これは患者の主な訴えを、緩和ケアチーム関与後の時間経過(横軸)と、キューブラー=ロスの受容の段階(縦軸)をもとに配置したものである。下線が引いてある訴えは、下肢麻痺(歩行障害)に関するもの、それ以外は原疾患ならびに死にまつわる訴えである。なお、最上段に希望にまつわる訴えを記載した。

6事例の検討の結果、以下の事柄が明らかとなった。すなわち原疾患であれ歩行障害であれ、患者の受容プロセスはキューブラー=ロスの5段階のプロセスとほぼ一致し、希望はどの段階においても患者から語られていた。原疾患と下肢麻痺は、患者にとっては別のものとして認識されており、下肢麻痺の受容がある程度達したとき、はじめて患者は原疾患と死にまつわる問題に直面していた。ただしその際には、すでに原疾患の受容は比較的進んでいた。下肢麻痺の改善を希望している時期には現実的希望が語られ、原疾患や死に直面した時期にはよりスピリチュアルな希望が語られていた。そしてその多くは、最後に過ごせる居場所にまつわるものが多かった。またこのような心理状況に達した患者の場合、妻も患者と同様の受容プロセスを歩んでいた。

4. 考察及び結論

歩行障害を抱えながら終末期を生きる患者は、当初は下肢麻痺への受容が進み、その結果、原疾患の受容が進む。これは客観的な疾病構造の視点をもつよう教育されているわれわれ医療者の認知、すなわち下肢麻痺を原疾患の一症状として捉える姿勢とは、明らかに異なっていた。下肢麻痺の受容と同時に原疾患や死に直面することになるものの、その時点ではすでにそれらの受容は進んでいたことを考慮すると、下肢麻痺への注目は、患者の真の苦痛を回避させる過程であった可能性が存在した。

なお、下肢麻痺や原疾患の受容の過程で特記すべ

きことは、「諦め」の時点が存在する点であった⁴⁾。それはこれまでの価値観を手放し、新たな価値観を見いだす時点であり²⁾、その新たな価値観の多くが、最後に過ごせる居場所の希求とその獲得にあった。

このような患者の、悲嘆プロセスが受容へと進む際に、妻の果たす役割は大きく認められた。逆に患者の性格傾向や病状が妻の悲嘆プロセスの進行に影響を及ぼしうることも推察された。

緩和ケアチームに求められていることは、患者にとって辛い状況が苦しみそのものでも、その苦しみを取り除こうとすることのみが必要なのではなく、むしろ患者自身が新しい希望を見だしていくためのプロセスとして認識し、それを家族とともに支援することにある。とりわけ日本人のスピリチュアルな希望が、帰郷願望¹⁾に象徴されることを鑑みれば、緩和ケアチームの役割は、患者と家族の受容の特徴と過程をよく見極め、希望と諦め、帰郷願望を家族と共に支えることにあると思われた。

(当論文は、平成20年度順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科の修士論文を基に作成されたものである)

参考文献

- 1) 広沢正孝：緩和医療におけるスピリチュアル・トータルペイン，LiSA，14(3)，222-225，(2007)
- 2) 池田優子：「癌になってよかった」という思いの意味とその構造，Quality of Life Journal，3(1)，42-47，(2002)
- 3) Kubler-Ross, E. (川口正吉訳)：死ぬ瞬間，289-292，読売新聞社：東京(1971)
- 4) 横山利枝，原田朋代：終末期がん患者の欲求と希望に関する研究，看護実践の科学，30(12)，69-74，(2005)

(平成21年3月31日 受付)
(平成21年3月31日 受理)